

マックス・シェーラー「認識と労働」におけるプラグマティズム評価

音喜多 信 博

はじめに

認識論の歴史のうえで、現象学とプラグマティズムはまったく対立するふたつの潮流であるとされてきた。フッサールは、プラグマティズムという思想潮流そのものについては論じてはいない。しかし、たとえば現象学の確立の書と言われる『論理学研究』の「プロレゴメナ（序説）」（1900年）において、フッサールは、論理学についての心理学主義的な理解や、アヴェナリウスやマッハによる論理学の生物学的基礎づけの試みに対する批判をおこなっているが、これらは広い意味でのプラグマティックな思想に対する批判であると理解することができる。一方、近年ではむしろ、これらふたつの流派の交流が盛んである。特に、H・ドレイファスらによるハイデガーやメルロ＝ポンティについてのプラグマティックな解釈が広く知られている。

しかしながら、ハイデガーやメルロ＝ポンティの実存主義的現象学が、本当にプラグマティズムに包摂され尽くしてしまうような思想であるのかということについては、慎重な留保が必要であろう。われわれは、ここではこのテーマに立ち入ることはできない。そのかわりに、現在見られるような現象学とプラグマティズムとの対話について考えるうえで必要なこととして、その歴史的起源を検討してみたいのである。歴史的に見るならば、プラグマティズムとの最初の接点をなした初期現象学者は、マックス・シェーラーである。シェーラーは、ハイデガーやメルロ＝ポンティ以前に、すでにプラグマティズムとの直接的対話をおこなっていた。

その主要な舞台になったのは、1926年に『知識形態と社会』所収の第二論文として発表された長大なモノグラフ「認識と労働」である。実はシェーラーは、この論文以前にもプラグマティズムについて批判的に言及している。しかし、彼のプラグマティズム批判が全面的に展開されるのは、やはりこの論文においてである。

はじめに結論的なことを述べておくならば、シェーラーのプラグマティズムに対する態度は両義的である。シェーラーは、プラグマティズムを批判しているが、それはプラグマティズムの意味理論、真理論についてである（本稿第1節）。しかし、それと同時に、シェーラーはプラグマティズムの「衝動的・運動的」知覚論を高く評価している（第2節）。また、シェーラーは、プラグマティズムの意味理論や真理論は相対主義に導くものとして批判しているが、同時に、認識の「対象」の「現存在相対性」は認めてもいる（第3節）。この両義性をどのように理解したらよいか、整理して提示することが、本稿での目的である。

第1節 「認識と労働」におけるプラグマティズム批判

「認識と労働」においては、プラグマティズムの出発点をなしたと言われているCh・S・パースの論文「われわれの観念を明晰にする方法 (How to Make Our Ideas Clear)」(1878年)が祖上にあげられている。しかし、シェーラーは、この論文自体の内容をこまかく検討・分析してはいない。

当時は、まだプラグマティズムの思想がドイツで紹介されたばかりのころであり、ドイツの哲学者たちは、W・ジェームズの『プラグマティズム』(1907年)やC・S・シラーの『ヒューマニズム』(1903年)をとおしてプラグマティズムを学んでいたようである。実際、シェーラーのプラグマティズム理解も、ジェームズの『プラグマティズム』に大きく依拠している。

ドイツ人たちのプラグマティズムへの最初の反応は、プラグマティズムは、アメリカの実用重視の文化を反映した実証主義の一形態であるとして、批判的な眼差しを向けるというものであったようである¹⁾。研究者によっては、シェーラーの戯画化されたプラグマティズム理解が、その後のドイツ人たちの誤ったプラグマティズム理解を決定づけてしまったという見方もある。しかし、私が見るところでは、シェーラーのプラグマティズム評価はそのような批判に尽くされるものではなく、かなり深い洞察を含んだものとなっている。

シェーラーは、パース自身の思想の内容を精査しているというよりも、パースの思想をどのように解釈するかに応じて、さまざまな立場が想定できるということを論じている。こうして導き出されたさまざまなプラグマティズム的思想をひとつひとつ検討してゆき、それらがいずれも背理に陥るということを証明しようとする。その結果、シェーラー自身の現象学的立場が改めて根拠のあるものとして提示されるという議論が展開されている。本稿では、シェーラー自身の現象学的知識論について主観的には論じないが、彼が自らの思想を形成するうえで、プラグマティズムとの対決がどのような意味をもっていたのか、という観点から論を進めたい。

さて、シェーラーは、プラグマティズムの最初の論理学者として、G・ブールの名をあげている。ブールは、以下のようなふたつの論理学的原理をあげているが、シェーラーによれば、それらは疑いなく偽であり、不合理でさえある (EA:233/72)。

- ①「同一の行為へと導く二つの命題は意味同一的である。」
- ②「ある命題はそれが有用な、あるいは生を促進する結果をもつ行為を規定するとき真である。」

前者は命題の「意味」に関する原理であり、後者は命題の「真理」に関する原理である。われわれは、前者に関する議論を「意味理論」と呼び、後者に関する議論を「真理理論」と呼ぶことにしよう。

まずは、プラグマティズムの「意味」概念について見ていこう。シェーラーは、パースの意味理論について考える主要な3つの解釈を示しているが、それは以下のとおりである。

1) 当時のドイツ人研究者たちのプラグマティズム受容については、Davis (2017), pp.159-161 を参照のこと。この論文は、プラグマティズムとの対決が、シェーラー自身の思想形成に与えた影響について論じており、本稿執筆にあたって裨益されること大であった。ただし、Davisは、シェーラーによるプラグマティズムの意味理論や真理理論に対する批判、および「現存在相対性」の議論については、ほとんど論じていない。

①ジェームズや本来のプラグマティストたちによる解釈

これは、「思想の実践的結果とその意味および意義とが同一であり、この実践的結果の表象とこの『意義』の理解および知識とが同一であるというラディカルな解釈」(EA:213/42)のことである。

②「論理的生産性 (logische Fruchtbarkeit)」に注目する解釈

これは「プラグマティズムに近い考えの研究者たち」による解釈であり、「思想の意味と意義が思想から得られる論理的帰結と一致する」(EA:213/43)とするものである。この場合の「論理的生産性」の指標となるのは、われわれの世界像の統一性、命題相互の無矛盾性、すでに証明された理論との整合性などである。

③パースの思想を、ライプニッツが「観察可能性の原理」と名づけたものと同一視する解釈 (EA:214/44)

シェーラーが論ずるところでは、パースのテーゼは、もしそれがあらゆるタイプの思考に対して妥当性を有すると想定されるならば、3つの解釈のうちのどれを考慮しようとも誤りである。ここでは、議論の必要上、第一の解釈と第二の解釈のみを検討しよう。まずは、第二の「論理的生産性」に注目する解釈について、シェーラーが述べていることを見てみよう。

シェーラーによれば、ある命題の意味を、その命題から生じる論理的帰結と同一視することはできない。なぜなら、「このことは、帰結 [結果] によって根拠 [原因] が一義的に決定されることはけっしてない、という形式論理学の疑う余地のない命題とすでに矛盾している」(EA:216/47) からである。異なった諸命題が同一の帰結をもつことがあり得るのだから、ある仮定を論駁するひとつの事実はその仮定を破棄することができるが、逆にある仮定に一致する諸々の事実が存在するからといって、その仮定が証明されたということにはならない。

これに関連して、シェーラーは以下のように述べている。

パースの理論によれば、その都度の新しい証明にともなって（そして、一つの命題に対してつねに多くの証明が存在する）、命題の意味も変わらねばならないということになる。一方で、完全に一義的な意味をもつひとつの命題が、好きなだけ多くの仕方でも証明されるにもかかわらず。(EA:216-217/48)

このように、あるひとつの命題の意味をその論理的諸帰結と同一視することが誤りなのであれば、その意味を命題の「実践的生産性 (praktische Fruchtbarkeit)」と同一視する第一の「ラディカルな解釈」は「二重に誤っている」。その理由は、以下のとおりである。

しかし世界の成り行きについてのまったく異なった理論的前提が、正確に同一な実践的行動様式を規定でき、そしてまったく同一の前提が、まったく異なる実践的態度を——われわれの行為がその実現に仕えるべき、単なる知識によってはけっして一義的に規定されることのない目的に応じて——規定することができるのは、疑いのないことである。(EA:233/73)

以上が、パースの「意味」理論に対するシェーラーの反論である。

さて、シェーラーがパースの論文のなかに見出す第二のプラグマティックなテーゼは、「真理の新しい定義」である。これをシェーラーは、以下のように定式化する。

上に述べられた仕方の意味と意義が確認された命題は、その命題がきっかけとなって表象された行動が合目的であると証明されたとき、換言すれば、その行動によってある意図が達せられ、ある願望が満足され、ある期待が充足される時、真である。これに従って、真理理念も、本質的に実践的な意味をもち、一種の利用可能性と有用性になる。(EA:219/52)

シェーラーが言うには、これはとりわけシラーによって展開された定義である。このような定義に基づけば、真理とは特定の行為主体の主観や行為の状況に相対的なものになってしまうのではないだろうか。これはシェーラーが断固として認めることのできない主張であった。シェーラーによれば、真の意味での知識や真理は絶対的なものであり、関係のあるいは相対的なものではない。このように述べるときにシェーラーの念頭にあるのは、『論理学研究』の「プロレゴメナ」においてフッサールによって展開された議論、つまり当時流行の心理学主義や生物学主義に抗して、論理的対象と真理の絶対性（イデア性）を擁護する議論であったと思われる（EA:200/23）。

このように見ていくと、シェーラーは、プラグマティズムの意味理論や真理論からは一種の相対主義が帰結すると考えているようであり、そのような観点からプラグマティズムを批判している。しかしながら、プラグマティズムから帰結すると考えられる認識の相対性は、論理学とは別の観点から、より積極的なかたちでシェーラーの理論のなかに取り入れられている。そのことについては、第3節で見ていくこととする。

第2節 プラグマティズムに対する積極的な評価

前節では、プラグマティズムに対するシェーラーの批判を見てきたが、このことによって、シェーラーはプラグマティズムを全面的に否定し去っているわけではない。シェーラーは、プラグマティズムの意味理論と真理論を否定しているものの、知覚論については正しいところもあるとしている。そして、プラグマティズムの知覚論は、伝統的な認識論の誤りに対して、正しい人間観を突きつけていると評価している²⁾。

具体的に見ていこう。シェーラーによれば、プラグマティズムは、機械論的自然観の一部としての、感覚主義的・機械論的な経験の心理学を批判し、知覚は生命論的に捉えられる必要があるとした。知覚は、全面的に受動的・因果的な機械的プロセスではなく、主体の実践的関心に導かれた行為と一体となった生命的過程である。この点を明らかにしたのが、プラグマティズムの功績である。

当時の経験的心理学（とくにH・v・ヘルムホルツらの生理学的心理学）は、近代的な形式的・機械論的自然観の一環として生じてきた。広い意味で考えるならば、この流れにはG・フェヒナーらの精神物理学、W・ブントらの要素心理学も含まれると考えてよい。機械論的な経験的心理学の前提は、要素主義、感覚主義、連合主義である。これらは、経験主義的な哲学（ロック、バークリー、ヒューム）から継承された考え方である。

当時の経験的心理学は、「恒常仮説」と呼ばれる考え方を共有していた。それはつまり、感覚は有機体の感覚器官にあたえられた特定の物理的刺激に一对一で対応しており、感覚の強さ

2) この問題については、音喜多(2005)ですでに論じておいた。本節の内容は、この拙論と一部重複する部分があることをお断りしておく。

は刺激の強さに（あるいはその対数に）比例するという機械論的な考え方である。

しかしながら、われわれの生きた経験のなかの現象としては、厳密に刺激比例的な感覚など存在しない。シェーラーとて、要素的な「感覚」の経験がまったく存在しないと述べているわけではない。しかしながら、要素的な感覚は、反省的な分析の結果はじめてあたえられるものであって、われわれの自然的知覚にあたえられるものではない。したがって、経験の心理学のように「感覚」を原初的なものとするのは、一種の理論的虚構である。われわれの原初的な経験は、ゲシュタルト心理学が言うところの「ゲシュタルト」である。ゲシュタルトは、要素に還元できない全体と定義されるが、知覚的所与とはこのような全体であって、要素的な感覚の総和ではないのである。

さて、機械論的な心理学は、感覚をまったく受動的なものと考え、逆に知覚のなかに知的判断を入れこむことによって、知覚を二重化してしまった。たとえば、「ゲシュタルト」は、受動的にあたえられた要素的な感覚を総合して、「～として見る」という知的判断作用に帰されることになる。ただ、日常的な経験においては、そのような判断作用は無意識的であり、「気づかれない」だけだというのである。これに対して、シェーラーは、ゲシュタルト知覚はそれ自体が感覚と判断に分解できない原初的な所与であり、それは生物の生命的衝動の構造によって規定されていると考える。つまり、知覚は知的「判断」とは言えないにしろ、まったくの受動的プロセスでもなく、生体の生命的衝動に基づく関心の方向と運動とによって規定された、一種能動的な作用なのである。このことを、シェーラーは「知覚の衝動的-運動的な制約性 (triebhaft-motorische Bedingtheit)」と呼んでいる。

「知覚の衝動的-運動的な制約性」の考え方は、つぎの一節において端的に表明されている。少々長くなるが、引用しておこう。

知覚の衝動的-運動的な制約性についてのすべての理論の始まりをなす基本的立場は、つぎの命題に要約されることができる。すなわち、感覚諸機能とそれに属する諸器官は、自然についての無関心で理論的な知識の道具ではけっしてなく、自然へのわれわれの行為 (*Handeln*) の規制と修正の事柄である、ということである。これらの諸機能や諸器官は、さらに、有機体の全体とその全体的な生理学的生命維持能力からいわば孤立した、隔離されたものではなく、[・・・] 他のすべての諸器官や諸機能とまったく同様に、またそれらの最も緊密な機能的統一と結合において、有機体の最適な生の進展に奉仕するという、まったく同一の目的志向的な全体意味 (*teleokliener Ganzheitssinn*) をもっているのである。(EA,283/146-147)

シェーラーによれば、このような「衝動的-運動的な知覚論」は、単に当時の経験主義的な心理学に対する哲学の側からの批判という以上の認識論的意義をもっている。つまり、感覚のなかに純粋に「受容的なもの」だけを見てとり、知覚とその内容はこれらの諸感覚の組み合わせから構成されると考えること、そして同時に、「知覚の中に、なるほどそれは『低次のもの』ではあるにせよ、『認識能力』を見ること」、こういったことを、伝統的な合理主義も経験主義も一致して前提としているのである (EA,284/147-148)。

さらに、知覚はすでに生物体の衝動に規定されており、運動的な過程の開始をともなっているとすれば、そこにはすでに生物体による「価値把捉 (*Werterfassung*)」(EA,284/147) がともなっていることになる。そうだとすれば、感性的経験が「事実」を与え、理性・知性の活動がそこに「価値」を付与するという「事実/価値」の認識論的二元論も、その正当性を失うこ

とになる。シェーラーは、事実と価値が不可分であるというプラグマティストたちの主張を高く評価しているが、それは同時に『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』（1913-16年）当時からのシェーラー自身の立場でもあった。

さらにシェーラーは、プラグマティズムが、知覚主体なしでもあらかじめ実在している客観的世界を、精神内の「心像（Bilder）」が模写するという近代以降の知識観を否定したことを高く評価している³⁾。

シェーラーによれば、知識を、「非物質的心像」による事物の「模写（Abbildung）」（あるいは「表象」）であると考えてはならない（EA:226-227/62-63）。つまり、外的な事物が、「心像」を介してわれわれの精神に与えられていると述べてはならない。なぜなら、この場合には、その知識が真なるものであるかどうかを知るためには、心像と外界の事物とが正しく対応しているかを確認する必要がある、われわれは両者を超越した第三の視点に立つ必要が出てくるが、そのようなことは不可能だからである。われわれは、心像と外界の事物とを比較することはできず、心像から心像へと送り返されるにすぎないことになるが、これは背理である。

近代的な意識観念論も批判的実在論も、意識と対象の様存在とをまったく別個のものとして考えているという点においては、共通してこの「模写」理論を信奉していると言える。シェーラーによれば、プラグマティズムはこのような「模写」理論を否定する。プラグマティズムの思想は、古い経験主義や感覚主義、合理主義とは異なり、「認識される『事実』が認識に先立って存在するという想定」と縁を切ろうとする。「この『意味』も『事実』も、認識者によって、まさに創造されるのである」（EA:216/46）。この意味で、プラグマティズムは構成的な思考法であり、素朴な実在論や感覚主義的な経験主義とは異なる。

われわれは、前節において、プラグマティズムの意味理論や真理論に従えば、命題の意味が一義的に決まっていこないというシェーラーの懸念について見てきた。ここでは、さらに知覚論のレベルにおいても、似たようなことが言われうる。そもそも「事実」なるものが、知覚と行為の主体によって「創造される」とするならば、ここから帰結するのは一種の相対主義ではないだろうか。

しかしながら、シェーラーに言わせれば、プラグマティズムの部分的な真理性を認めることによって、相対主義は帰結しない。相対主義に陥るのは、プラグマティズムが理論の対象としている知識を、人間の知識の全体として受けとるときだけである。シェーラーによれば、プラグマティズムから帰結すると思われる認識の相対性は、真理そのものの相対性（多元性）ではなく、認識の「対象」の相対性にすぎない。プラグマティズムの知識観を、知識の全体像のなかにきちんと位置づけられれば、相対主義は帰結しないというのである。

第3節 「現存在相対性」をめぐる議論

上で述べたような認識の「対象」の相対性は、シェーラーによって「現存在相対性（Daseinsrelativität）」（あるいは「存在相対性（Seinsrelativität）」と呼ばれている。「認識と労働」では、いくつかの箇所においてこの概念が使用されているものの、具体的な定義などはなされていない。そこで、われわれは、シェーラーがこの概念をはじめて積極的に打ち出した

3) このことは、今日のネオ・プラグマティズムの認識論的議論のなかで「表象主義批判」という名称で呼ばれていることに相当する。

生前未刊行の草稿「現象学と認識論」(1913-14年執筆)を参照したいと思う。そこでは以下のように言われている。

あらゆる認識の絶対的基準は、「事態がそれ自体として与えられていること(自己所与性)」である。しかし、われわれの日常的経験の世界(「自然的世界観」)と科学の対象として見られた世界(「科学的世界観」)においては、認識作用の担い手に帰属するある形式、機能、方法、選別契機などが認識のあり方を制約している。このように認識作用の担い手に基づいている対象は「現存在相対的」と呼ばれる。一方、認識を制約する形式、機能、方法、選別契機などがなく、作用の担い手の機構とも関係なく、純粋な作用の内にもみ与えられているような対象は、「絶対的現存在」と呼ばれる(PE:398-399/322)。

さきに見たように、プラグマティズムは、「人間の——すべての有機体も——世界に対する原初的な関係がけっして理論的なものではなく、実践的なものであり、したがってすべての『自然的な』世界の見方が実践的な動機によって統制され導かれているということ」(EA:239/81-82)を正しく理解していた。これは、言い換えるならば、人間の自然的知覚は、人間という生物のそなえる有機的機構の衝動と運動とに「現存在相対的」であるということである。これは、同じ外的な対象を見ても、ひとりひとりの人間の知覚するものが異なる、という「主観的相対性」の主張とは異なる。そうではなくて、生物の種としての人間が共通にそなえている、「(心)像」を産み出す機能が問題とされている。

その具体的な特徴として、シェーラーは以下のようなものをあげている(EA:239-240/82)。すなわち、實在(現存在)の定立のほうが様存在の定立よりも優位にあること。物体や事象に先行するような時間や空間という「空虚な形式」が定立されること。流動的な気体物よりも具体的な固体物を優先的に注意の中心におこうとすること。非同型的で一回的な、それゆえ制御不可能な生起現象よりも、同型的に繰り返す制御可能な存在と生起を優先的に知覚すること、などである。

さて、自然的世界観が人間の身体組織に相対的であるとしても、科学的世界観は、相対的ではない絶対的な知識を提供してくれるのではないだろうか。ところが、シェーラーによれば、自然科学の知識の対象も絶対的なものではないという⁴⁾。これは、どういうことであろうか。

まず、科学が、人間の自然的世界観の相対性を乗り越えるということについて考えてみよう。自然科学の理論は、最終的には物理学の諸法則によって、あらゆる自然現象に一義的かつ経済的に包括的説明を与えることを求める。そのことによって、自然的世界観に含まれる人間の実践的動機、つまり人間の有機的組織によって与えられている衝動的-運動的な制約を排去している。単純な例をあげれば、われわれの日常の世界では、太陽が「昇る」などと言われるが、それは天文学者にとっては意味をなさない。それは、有機的身体をもって地上のあれこれの場所に位置づけられて行為する事実の人間の視点を前提とした言い方である。物理学は、このような人間の視点の相対性や世界観の擬人性を排去して、あらゆる可能的な視点からの天体の運動を記述しようとする。

このように、科学は、「外的および内的世界のすべての現象をある(形式的)機構の従属的機能として理解するという目標を立てることによって、この現象の対象の現存在と様存在の条

4) 以下に論じられる「科学の対象の現存在相対性」については、Mulligan (2018), pp.41-46 で詳しく検討されている。さらにMulliganは、シェーラーの「現存在相対性」の議論が、当初は認識論的なものであったにもかかわらず、安易に存在論的な議論へと移行していることについて批判しているが、この問題については、ここでは立ち入らない。

件としての地上の人間の特殊な組織を、確かに排去している」(EA:240/83)。この意味では、近代科学は、自然的世界観のもつ相対性を乗り越えている。しかし、そのことは、近代科学が一切の現存在相対性をもたずに、絶対的な認識に至っていることを意味しない。シェーラーによれば、科学が自らの対象を選択するときの選別原理は、それはそれである種の評価に基づく実践的制約を負っている。

シェーラーが特に念頭においているのは、近代物理学（古典力学）の機械論的な自然観である。すなわち、科学は自然をある機械的組織の範疇へと還元するが、それは、自然そのものが実際に機械的組織にすぎないからではない。そうではなくて、自然が機械的組織に類似している範囲内において、われわれは自然の変化について予測をすることが可能となり、自然を操作・支配することが可能となるからである。ただし、科学が対象としている世界は、自然的世界観においてそうであるように、人間の有機的組織にとって操作・支配可能なものにすぎないというわけではない。シェーラーによれば、科学は、人間に限らず『生命体一般』によって運動可能なもの、したがってまた「制御可能なもの、支配可能なもの、回避可能なもの」を、自然のなかから優先的に選択して対象としている。言い換えるならば、人間の自然的世界観の内実が「擬人的に実践的」であるのに対して、科学の対象の選別は「本質生物学的な意味で(im wesensbiologischen Sinne) 実践的に」条件づけられているのである(EA:241/83-84)。

シェーラーによれば、このような近代科学の機械論的世界観の相対性を徹底的に暴き出したのは、やはりプラグマティズムである。これに関連して、シェーラーは、現代の理論物理学たちの「方法的プラグマティズム」について語っている。

「方法的プラグマティズム」とは、哲学的なプラグマティズムではなく、理論物理学者たちのそれである。シェーラーは、J・C・マクスウェル、L・ボルツマン、ケルヴィン卿らの名前をあげている。彼らにとって、自然を理解することとは、自然についての機械的なモデルを構築することである。彼らは、自然現象の形式的・機械的還元は、われわれが自然を理解するにあたって必然的なものであって、単に科学の発展の一段階において必要な操作にとどまるものではない。しかしながら、この還元そのものは一義的ではない。それというのも、「彼らの立場によればむしろ、自然現象の総体のそれぞれに対して、それを等しくよく『説明』できる無数に多くの異なった『機械的モデル』——マクスウェルの愛用語——がありうる」(EA:260/112)からである。これらのプラグマティストたちは、彼らのモデルが自然諸現象の背後にある決定的な現実(実在)を模写しているとは考えない。つまり、われわれの自然的知覚が、われわれの行為に役立つように現実を構成しているのと同様に、科学においても現実は理論とともに「構成される」というわけである。

このような現代の理論物理学者たちの方法論的な洞察によって、古典的な力学は相対化されているというのが、シェーラーの看立てである。先に見たように、科学の諸対象は、人間の事実に衝動と環世界を排去したところに成り立つ「本質生物学的な」諸対象である。しかしながら、そのことは、科学的世界観の対象がいかなる制約ももっていないということの意味しているのではない。自然的世界観の諸対象が人間という特殊な種の「自然支配の衝動」によって規定されていたのと同様に、科学の対象も、自然に介入し操作する衝動によって規定されている。ただし、この場合は、事実に人間の支配衝動なのではなく、「生命体一般の」支配衝動に現存在相対的なのである。

ちなみに、心理学の分野でこれに対応するのが、前節で見てきたような経験主義的・感覚主義的・連合主義的な心理学である。とくに、知覚を刺激と反応の一对一の対応関係として説明しようとする機械論的心理学がそれである。このような心理学においては、たしかにわれわれ

は、個々人の事実に相対的な心理現象を記述しているのでもないし、さらには人間特有の心理現象のみを扱っているのでもない。たとえば、刺激と反応の対対応を求める恒常性仮説などは、人間を越えて他の生物へも拡張しうる。人間の心理現象は、あくまでその一例に過ぎなくなる。

機械論的な心理学によって、ひとりひとりにおいて多様な心理現象を、あるいは生物種によって多様な心理現象を、あるひとつの法則によって表現し、その変化を「予測」できるようになる。それはあたかも、物理学が運動する物体の位置を予測できることによって、それを人間のコントロールのもとに置けるようになるということに似ている。

第4節 哲学的な知識の位置づけ

さて、このような自然的世界観と科学的世界観の対象の現存在相対性が明らかにされたとして、こういった相対性から自由な「絶対的な」知識の対象なるものは存在するのであるか。シェーラーによれば、哲学の対象は絶対的なものである。この場合の「絶対的」という言葉には、注意が必要である。それは、「将来も絶対に修正されることのない永遠の真理」ということを意味するのではなく、「現存在相対性をもたない」という意味である。

このような知の「絶対性」という問題に関連して、シェーラーによって提示されている知識の三類型について確認しておきたい。

シェーラーによれば、知識は一種の存在関係であり、知識を獲得する存在の「生成(Werden)」に関連している。したがって、この生成は何の、何からの、何への生成であるのかという問い、すなわち「知識の目標」の問題が生じてくる。シェーラーによれば、知識の背後には、必ず感情(エートス)に基づく目標があるのであり、したがって「知識のための知識」などという観念は無意味である。シェーラーは、知識をその目標に応じて3つの様態に分け、それらは相互に還元不可能であるとし、以下の順序で低いほうから高いほうへの位階を形成していると主張している(EA:205/30-31, cf.PSW:65-68/92-97)。

ひとつ目は「支配知 Herrschaftswissen (作業知 Leistungswissen)」である。これは、世界を実践的に支配し改造することをめざす知であり、人間の自然支配の衝動と相関的な知である。自然科学の知がこの代表である。哲学的プラグマティズムは、自然科学のなかに人間の知識の範型を見てとっている(科学主義)ことから分かるように、この「支配知」のみを対象としている。

ふたつ目は「教養知 Bildungswissen」であり、これは、知る人格の生成と発展をめざす。偶然的な「いま・ここに」における存在ではなく、世界と対象の「本質存在」を探究する知のあり方である。「教養知」は、無ではなくて何かがあることに対する「驚き(*θαυμάζειν*)」(PSW:65/92)という精神的感情と相関的であり、形而上学の知がその代表である。

三つ目は「救済知 Erlösungswissen」であり、これは世界根拠についての知である。自己の存在、運命、[心身の]安らかさを「救済せん」とする衝動と相関的な知である。宗教的な知的探究などが、その代表である。

さて、プラグマティズムが理論の対象とする知識は、実践的関心にとって与えられる知識(支配知・作業知)であるが、哲学(現象学)が与えるのは、本質についての知識(教養知・本質知 Wesenswissen)である。それは要するに、偶然的な「いま・ここに」における存在ではなく、世界と対象の本質存在を探究する知のあり方である。この「本質性の領域、換言すれば

根源現象と理念」からすれば、自らが体験している像は、ひとつの「実例」, 「見本」であるにすぎないものとみなされる。この方向に通じる感情（エートス）は、「現象学的還元」によって獲得される本質性への「驚きと謙虚さと精神的な愛」である（EA:362/260）。

これは、自らの支配衝動に基づいて、対象を動かす・制御する・支配するという関係性とは異なる。つまり、精神的存在である人間が、世界に対する自らの支配衝動をはたらかせず（括弧に入れ）、対象の様存在が自らを示すとおりに捉えるところに成立する（事象そのものの自己所与性）。真の意味で「客観的な」知識や「真理」と呼ばれるものは、ここにはじめて成り立つのである。

しばしば、現象学は実証科学を否定して、生きられるままの「自然的世界観」の経験を記述するものであると理解されてきた。しかし、シェーラーの議論をふまえるならば、それは表面的な理解にすぎないことが分かるであろう。シェーラーは、フッサールのいう「形相的還元」に強くこだわっている。つまり、現象学が対象としているのは、事實的・個別的現象としての知覚や想起や想像や思考なのではなく、それらの作用の本質的なあり方であり、またそれらの作用と世界との志向的關係の本質的なあり方である。

シェーラーは、（いささか強引なやり方によってではあるが、）本質学である現象学と対比するかたちで、哲学的プラグマティズムを経験科学と同じような事実学の水準へと貶めている。いわく、プラグマティズムは、「本質知」と「偶然的-事実-知」との区別、「アプリアリな知識」と「アポストリアリな知識」の区別をまったく誤解しており、その意味で「経験主義の新しい形式」にすぎない。プラグマティズムが正当にも強調している行為と知識との相互關係は、単に偶然的な諸事実とそれに関する知識の領域にのみ関連することであるというのである（EA:232/70-71）。

それでは、知識の生成についてシェーラーがどのように考えているか、具体的に見ていこう。シェーラーによれば、われわれの認識は「直観」と「思考」から形成されている。直観とは「心像をもつこと」であり、思考とは「意義をもつこと」である。知識が明証的であると言えるのは、直観されているものと思われているものとの「合致の統一（Deckungseinheit）」が成り立つときである。（これは、フッサールの『論理学研究』を継承している現象学的な考え方である。）そして、「真（理）」とは、このような明証的な知識が判断（命題）のかたちで表現されたときに、その判断の内容が事態と一致していることを指すのである。したがって、「真理」という概念それ自体が何か説明的な概念であるというよりも、それは直観の充実の十全性（Adäquation）と認識の明証性（Evidenz）とに基づくものであるとすることができる。

それでは、現象学的な「直観」とは、どのようなものであろうか。経験主義的・感覚主義的な心理学によれば、知識の起源にあるのは、中性的・要素的な感覚与件の集合である。経験主義によれば、あらゆる知識は、このような諸々の感覚与件の組み合わせによって、あるいは（論理実証主義者風に言えば）このような感覚与件を記述した要素命題の組み合わせによって獲得されるということになる。しかし、プラグマティズムが明らかにしたように、このような要素的な感覚は、あくまで機械論的な心理学の理論的な構築物にすぎない。これに対して、現象学でいう「知覚的直観」の対象はゲシュタルト的な様存在であって、心的な志向作用のなかで、すでに意味的に構成されたものである。さらに、現象学は「本質直観」や「カテゴリー的直観」の存在も認めているが、ここには言語的な概念のはたらきも内含されている。このような意味をはらんだ直観であるからこそ、直観された内容は、思考の対象となり判断（命題）の要素として組み込まれるのである。

ここで注意すべきことは、現象学的に与えられる直観、すなわち知覚的直観と本質直観と

は、すでに「精神的直観 (geistiges Schauen)」(PE:380/292) であるとされていることである。繰り返しになるが、シェーラーによれば、対象の様存在そのものは、人間の支配衝動を排除あるいは括弧入れした「精神的」レベルにおいてはじめて、われわれに対して現れる。そのことは、思考されたものにおいてのみならず、直観されたものにおいても当てはまる。このような「精神的直観」を、知識のアプリオリな出発点として認めるところに、現象学の要諦がある。シェーラーにとっての現象学とは、哲学の一方法であるというよりも、こういった「精神的直観」を認める「立場 (Einstellung)」のことなのである (PE:380/292)。

しかし同時に、「認識と労働」と同時期の論考「観念論—實在論」(1927年)のなかで、シェーラーがフッサールの立場を批判していることにも注意しなければならない。フッサールが、上記の「合致の統一」の理論において、思考されているものを直観されたものに一方的に基づけようとするのに対して⁵⁾、シェーラーは、この合致は厳密に相互的なものであると考える (IR:201/312)。シェーラーによれば、厳密な意味で対象の様存在が「みずから」把握されたと言うことができるのは、つぎのようなときである。

すなわち、「意味されたもの [思考されたもの] が直観されたものと完全に合致 (decken) するか、あるいはすべての部分的直観が (視る、聴くなどさまざまな様式の機能によって媒介されて) 相互に合致し、さらには記憶や期待と合致するところ」である。そして、「同様に、われわれが事象の客観的に『意味すること』を漸次的に捉え、部分的意義が補完されて全体的意義になるところである。この合致体験、あるいは諸合致体験の結果 (明証) において、精神のなかで事象は『それ自体』によって、その様存在からますます十全的に明らかになる」(EA:204/29)。

この引用から分かるように、直観の充実の十全性と、直観されたものと思われたものとの合致の明証性とは相補的なものであり、直観の十全性が合致の明証性を高めるとともに、合致の明証性が高まることによって、不十分であった直観の十全性が高まることもある。この点において、知識の獲得はホーリスティックかつ漸進的なものなのである。

シェーラーによれば、このような知識の獲得のプロセスの背後に「行為の成功のため」とか「生存が有利になるため」といったプラグマティックな原則を想定することはできない。そのような想定をするならば背理に陥るとというのが、第1節で見たシェーラーの議論であった。むしろ、プラグマティズムがそういった想定のもとに理論を構築しようとするときには、われわれに原初的に与えられている直観の充実や認識の明証性の経験を、それと主題化することなく利用しているのである。

第5節 まとめと展望

最後に、本稿の議論のまとめをおこなうとともに、今後の展望について言及したい。

冒頭で述べたように、本稿は、シェーラー自身の積極的な知識論について詳しく論ずることを目標とはしていない。本稿では、「認識と労働」におけるプラグマティズムとの対決が、

5) シェーラーがここで念頭にしているのは、フッサールが『イデー』第1巻第24節で「あらゆる原理の原理 (Prinzip aller Prinzipien)」と呼んでいる事柄である。そこでは、すべての原的に与えるはたらきをする直観こそが、あらゆる認識の正当性の源泉であり、いかなる理論もこの原理に従うのでなければならない、という趣旨のことが述べられている。ただし、シェーラーのフッサール批判が、厳密に言って正当なものであるかどうかについては、ここでは措いておく。

シェーラーの思想形成のなかでどのような意味をもっていたのか、ということを中心に確認する作業をおこなった。

これまで見てきたように、シェーラーは、パースやジェイムズといった古典的プラグマティストたちの議論を、ひとつひとつテキストに即して検討するということをしてはいない。むしろ、シェーラーは、プラグマティズムの原理を自分なり敷衍して意味理論、真理論、知覚論に適用し、その帰結まで歩み通すことによって、逆説的なかたちで、プラグマティズムによっては気づかれていない「本質知」の次元、つまり現象学的な知識論の次元を、それとして浮かび上がらせることを試みていたと言える。この点のみに注目するならば、シェーラー現象学とプラグマティズムとの対立は、先鋭化されたかたちで現れてくる。

しかしながら、シェーラーとプラグマティズムの親近性も明らかになった。シェーラーは、前節で確認した知識の三類型についての議論のなかで、知識の背後には感情（エートス）が控えており、本質知も含めたあらゆる知識には生成目標があると述べている。したがって、あらゆる知識の獲得には、それに先立つ価値の把握・感得が伴うということになる。ここには、事実と価値（規範）、あるいは科学と道徳を峻別しないというプラグマティズムと共通の志向が見られる。プラグマティズムが、あらゆる知を実践知に還元するというという限りでは、シェーラーはプラグマティズムの批判者である。しかし、事実と価値の不可分性という観点から言えば、シェーラーにもプラグマティックな側面がある。

さて、シェーラーがプラグマティズムの意味理論や真理論を非難する際に特にこだわっていたのは、プラグマティズムにおいては、その文脈主義ゆえに命題の一義性が担保されないということである。そのことによって、プラグマティズムは知識や真理についての相対主義に陥るというのが、シェーラーの看立てであった。

しかし、現在の「ネオ・プラグマティズム」の動向を見ると、ジェイムズ・シラー流の古典的なプラグマティズムに見られたようなプラグマティックな真理概念（単純な「行為の成功」や「生存の有利性」等々を基準とする真理概念）は必ずしも保持されていない。また、初期のプラグマティストたちに見られた強い「科学主義」についても留保がなされ、科学的な知や日常的な知を含めたさまざまな知識が全体としてネットワークを形成しているということを強調する議論もなされている。そして、W・V・O・クワインの「根元的翻訳」やD・デイヴィッドソンの「根元的解釈」の議論に見られるように、新しいプラグマティズムは意味や指示の不確定性を認めつつも、相対主義に陥らない道を模索している。意味や指示の不確定性は、プラグマティズムの弱点というよりも、むしろ旧来の経験主義の感覚主義的な基礎づけ主義に対するアンチテーゼとして、可謬主義のスローガンとして積極的に捉え返されているのである。

シェーラーの議論は、こういった新しいプラグマティズムの動向ともまったく相容れないものなのか、これは検討するに値する課題である。見てきたように、シェーラーはフッサールの基礎づけ主義（「あらゆる原理の原理」）をも批判しており、彼の「合致の統一」の理論は、ホーリスティックかつ漸進的な知識観となっている。そして、シェーラーは、知識の多元的なあり方を認めつつ、真理概念の相対性を否定するという、これまた現代のプラグマティストに見られる態度を共有している。

以上のように、シェーラーの知識論と今日のプラグマティズムの知識論を、さらに深い観点から関連づけ、その異同について検討することができると思われるが、これらの課題については稿を改めて論じたいと思う。

引用文献

シェーラーの著作からの引用については、下記の下線部にある略号を用いて本文中に指示し、原文のページ／邦訳のページの順に記した。引用にあたっては邦訳を参照したが、表現の統一の都合上、適宜筆者が改めた箇所がある。

- Davis,Z. (2017), “Max Scheler and Pragmatism,” in: Švec,O./Čapek,J. (ed.), *Pragmatic Perspectives in Phenomenology*, Routledge, pp.158-172.
- Mulligan,K. (2018), “How to Marry Phenomenology and Pragmatism: Scheler’s Proposal,” in: Baghramian,M./ Marchetti,S. (ed.), *Pragmatism and the European Traditions: Encounters with Analytic Philosophy and Phenomenology before the Great Divide*, Routledge, pp.37-64.
- 音喜多信博 (2005), 「後期シェーラーの知覚論——「認識と労働」をめぐる」, 『思索』第38号 (東北大学哲学研究会), 67-90頁。
- Scheler,M. (1980 a), “Probleme einer Soziologie des Wissens,” in: *Die Wissensformen und die Gesellschaft, Gesammelte Werke Bd.8*, Francke, S.15-190. 「知の社会学の諸問題」(浜井修・佐藤康邦・星野勉・川本隆訳), 『シェーラー著作集11 知識形態と社会 (上)』白水社, 1978年。(PSWと略記)
- Scheler,M. (1980 b), “Erkenntnis und Arbeit: Eine Studie über Wert und Grenzen des pragmatischen Motivs in der Erkenntnis der Welt,” in: *Die Wissensformen und die Gesellschaft, Gesammelte Werke Bd.8*, Francke, S.191-382. 「認識と労働——世界の認識における実用的動機の価値と限界についての一研究」(弘陸夫訳), 『シェーラー著作集12 知識形態と社会 (下)』白水社, 1978年, 11-289頁。(EAと略記)
- Scheler,M. (1995), “Idealismus-Realismus,” in: *Späte Schriften, Gesammelte Werke Bd.9*, Bouvier, 1995, S.183-241. 「観念論—実在論」(亀井裕・山本達訳), 『シェーラー著作集13 宇宙における人間の地位・哲学的世界観』白水社, 1977年, 283-376頁。(IRと略記)
- Scheler,M. (2000), “Phänomenologie und Erkenntnistheorie,” in: *Schriften aus dem Nachlaß Bd.I, Zur Ethik und Erkenntnistheorie, Gesammelte Werke Bd.10*, Bouvier, S.377-430. 「現象学と認識論」(小林靖昌訳), 『シェーラー著作集15 羞恥と羞恥心・典型と指導者』白水社, 1978年, 289-373頁。(PEと略記)

(付記)

本稿は、日本学術振興会・2019年度科学研究費助成事業 (学術研究助成基金助成金) (基盤研究 (C)) 「現代独仏圏の哲学的人間学と J・マクダウェルのアリストテレス的自然主義」(課題番号17K02156 研究代表者・音喜多信博) の研究成果の一部である。